

(こ)がいて、いつも皆に逆らっては、問題をおこしているみたいだった。その子は体が弱くて、半年位遅れているので何か皆に対して弱気な所を持っていた。ひょうひょうとして、おどけた風でもなく、しかも往々、何か動作の1つ1つがとびぬけたような所があった。ホーム・ルームの時だったか、掃除について話し合いが行われた。その子がいつも班長のいう事を聞かない、と訴えられた。ノラクラしていると責められた。皆が彼に迫った。彼は1人弁解にならない事をひょうひょうと云うだけで、話し合いが進まなかった。皆の非難が一斉に彼に向けられていた。時間がなかった。その時、先生が、こうおっしゃった。「Aは決して掃除をなまける子ではないと思いますよ。班長の言う事を聞いたかどうかは、わかりませんが…。皆がベルがなって掃除道具も片づけず、さっさと行った後からAは一人でバケツやゾーキンを片づけていたり、掃除の始まる前から机を後に運んでいたり、先生は、Aは掃除好きなんだと思っていますよ」と静かに、きっぱりと言われた。皆シーンと静まって、緊迫していた空気がなごむのを感じた。その後はもう皆、普通だった。その日の放課後、次の日私が教壇に立つので少し居残って、板書をどうしようかと、一度教室へ行ってみようと思って戸を開けた。Aが1人黒板消しを両手にもって黒板をふいていた。私は、先生と生徒の美しいやりとりを見た気がして、すっかり感動した。又その日丁度早退けした子で、いつも一人Aをかばってやっている隣の席の子がいた。二人のやりとりも実にほのぼのとして、又頼もしかった。もう一つ、最後に、私の教育実習で得たことは、友達を見つけた事だ。彼女も私も皆から言わせると理想主義なのだろうである。いつも夢を描く。もう捨てかけようとした夢、子供らしい夢を、久しぶり、純粋で単純な世界に触れて、お互い取り戻し、勇気を得た。同じような友がいたことが嬉しかったし、いつまでもこの心は忘れまいと、約束した。とても思い出深い小学校の教育実習だった。

## 「書評」 De Mauro, T.: Storia linguistica dell' Italia unita, Bari, 1963

古 浦 敏 生

### § 1 著者の横顔

De Mauro, T. 氏は、1956年に Roma 大学で学位を取られ、現在、Roma 大学文学部言語哲学の助教授で、1961年以来、同大学の言語学の併任講師もしておられる。そして、多くの専門雑誌に一般言語学或は言語哲学の論文や書評をのせておられ、さらに、シンタクス研究、史的意味論、古代現代諸言語の比較研究など、幅広く活躍しておられる。

## § 2 内容外観

この書物「統一国家としてのイタリアの言語史」は、521ページから成るもので、全体が3部に分けられている。即ち、本文、ノート、付記である。但し、本文はわずか200ページで、残りのノートと付記を合わせたページ数の方がはるかに多い。

この書物には紫色の帯が付いていて、Gramsci, A. の「言語問題が生ずる度毎に、ほかの一連の問題が我々に課せられる。即ち、指導者階級の養成；指導者と一般大衆との間により密接な関係を確立することの必要性；即ち、文化的指導権を再編成することの必要性の問題が課せられる」と云う言葉が記してあり、本書の基本姿勢が暗示されている。

また巻頭には、Vico, G. B. (イタリアの哲学者) の言葉や、Wittgenstein, L. (オーストリアの哲学者) の「言語は、伝統のある古い町によく似ている。小さな道が入り組んだ所に、古い家もあれば新しい家もある。そして、その古い家には、種々の時代に行われた建て増しの跡がある。そして、これらが、アパートのように統一された家々や、規則正しい道路を伴った新しい区域によってとり囲まれているのである。言語を想う時には、人間の生活を想うのである。」と云う言葉も掲げられていて、哲学的色彩も示されている。

本書は、1861年のイタリアの政治的統一以来、第2次世界大戦の終りまでのイタリアの言語史を取扱っている。第一章では、イタリア語の文化的人種的政治的背景を述べ、第2章では、イタリアが統一される時代(約1859年～1870年)の諸地方の言語状況を述べている。第3章では、イタリアが統一されたために生じた社会的変化が言語に及ぼした影響を分析している。例えば、「学校における言語と方言」と云う箇所では、学校教育が言語に及ぼす影響の重要性を説き、教育の拡充とともに文盲が年々減ることを数字で示している。1861年(イタリア統一)には、イタリア全体で、75%だった文盲が、1911年には40%に減り、1951年には14%になっている。そして、1951年に50%弱の文盲がいる地方として、南部の Calabria, Basilicata を挙げている。第4章は、統一後一世紀間に起った共通語或は諸方言の形態的機能的変化の記述である。例えば、「外的刺戟と内的刺戟——改新と伝統——」と云う箇所では、言語間の相互影響の問題に触れ、18～19世紀のヨーロッパでは、第1次及び第2次産業革命の影響力と同じように言語の影響が広がった旨を述べ、西ヨーロッパ諸語(英語、フランス語、等)とイタリア語と東ヨーロッパ諸語(ルーマニア語、ブルガリア語、等)との相語影響に言及している。即ち、東ヨーロッパ諸語がイタリア語に与えた影響が微々たるものであるのは、丁度、イタリア語が西ヨーロッパ諸語に与えた影響がわずかだったのと似ていること；逆に、西ヨーロッパ諸語がイタリア語に与えた影響は大きく、それは丁度、イタリア語が東ヨーロッパ諸語に与えた影響が大きい

のと同じであること；等に触れている。

### §3 おわりに

雑誌 Language 40巻1号(1964)に本書の書評がアメリカの Cornell 大学の Hall, Jr, R.A. 氏によって為されている。氏は、本書の欠点を次のように云っている。

The major shortcoming of De Mauro's book lies, however, not in its content, but in its organization. The division into three sections..... main text, extensive notes, and even more extensive excursions..... renders reading quite difficult.

即ち、本書の最大の欠点は、構成がまずいために読みづらい点にある。私も全く同感である。また、著者は言語哲学の専門家なので、抽象的な内容が多くて面白さに欠けるのではないかと思っていたが、数字や用例も多く、具体性あふれるものであったのには救われる。

とにかく、本文第3章の、社会変化が言語に及ぼす影響の分析の項は面白いので、一読をお勧めしたい。

## 「英語に於ける形容詞の

## 比較変化形式について」

宮 本 美 枝 子

小論は英語に於ける形容詞の二つの比較変化形式、すなわち -er, -est によるものと, more, most によるもの, を取りあげた。

比較形式について文法書に書かれているルールは断固として守られているわけではなく二つの用式の間には fluctuation があるということに興味を持った。そして実際に、その fluctuation はどれ程あるものか、また fluctuation が起る場合にその理由は何か、ということテーマに5人の英国現代作家の小説13冊よりデータを集め調査した。

調査より二つの比較形式の用法に個人差の見られた形容詞、及び1個人内で fluctuation の見られた形容詞には28個あった。論文の第二章では、各作家に於ける fluctuation を起した形容詞の割合を、また第三章ではこれら28個の形容詞の全ての例を、統語論的、文体論的に検討した。その結果、ほとんどの例については解釈が出来たが、いずれと断言出来ないものもあった。